

はじめに

社会が変わっているのに、学校教育は昔のまま——よく聞かれる意見になりました。子どもを学校に入れて初めて、20〜30年前の教育と変わらないことに驚く親もいます。

不登校の小中学生は2020年度で約19万6000人と増え、「子どもが不登校になったらどうしよう」と、心配する保護者もたくさんいます。私もその一人でした。

そんな私を救ってくれたのが、

「ハッピーじゃなければ、転校すればいい」

というマレーシア人の友人の一言です。興奮気味に授業の面白さを語る中学生の話聞き、「世界の教育が、実は相当に面白いのでは？」と思い始めたのです。

我が家も、公立学校に馴染めなかった長男を連れて、マレーシアにやってきました。何より驚いたのは、その教育の多様性です。

公立教育にも、民族別に言語の選択肢が存在しますし、「グローバル化に対応したい」

と考える人たちのために、「インターナショナル・スクール（以下、インター）」が政府に認可され、中間層の現実的な選択肢になっています。

さらに「ホームスクール」と呼ばれる無認可の教育機関が一般化していることも知りました。そればかりか、英語圏のオンライン教材が実に多彩なので、まったく学校や塾を利用せずに、自学してしまうホームスクーラーもいます。「学校はもういらぬ」と思う人たちも、少なくないのです。

そして本当に転校が当たり前にできます。私の長男も、短期・長期を含め、合計9つの学校を経験しました。途中で、小規模なホームスクールでプログラミング学習を中心とした自学自習の日々を送った後、再び学校に戻っています。ここで「学び方を自分で選択する」経験をたくさん積んだことは大きな価値になりました。

あらためて日本を見ると、ちょうどマレーシアの10〜15年前の状況に似ていると感じます。教育が少しずつ「多様化」しているのです。

富裕層向けに「ボーディング・スクール」（全寮制の寄宿学校）が進出する一方で、格安の庶民向けインターも登場しています。

また、文部科学省の旗振りで、公立学校の中にも「国際バカロレア（IB）」認定校が

出てきて、少ないながらも選択肢が生まれています。公立の小学校でも英語やプログラミング教育が始まりました。

さらには「ホームスクーリング」の概念も少しずつ浸透してきています。文科省も2016年、不登校を「『問題行動』と判断してはならない」と教育関係者に向けて通知し、学校以外の学びの場所を認める方向に方針転換しました。角川ドワンゴ学園の「N高」のような独自のカリキュラムを持つ学校も登場しつつあります。

ただし、まだまだ過渡期なので、問題は起きるでしょう。その問題は、おそらく過去の東南アジア諸国で起きたことに似ているのではないかと考えます。

私はマレーシアで学校案内をしたり、「東洋経済オンライン」で「マレーシア子育て最前線」という連載をしたりして、現地の教育機関や保護者・子どもたち取材してきました。そのため「日本の教育に不安があり、海外で学ばせたい」という保護者の方からの相談をたくさん受けます。

日本の学校教育関係の方はもちろん、海外（オランダ、シンガポール、タイ、フィリピンなど）で子どもを育てている方、教育関連の仕事をしている方とも意見交換し、私自身も、現地の教育機関でスタッフとして働いていた時期があります。

そのうち、おぼろげながら、世界中の教育がだいたいどこへ向かっているのかが見えてきました。とはいえ、「世界の教育について書く」のは非常に難しく、まだまだ知らない部分もたくさんあります。

しかし一周回ってわかったことは、「万人に合う教育はない」こと、そして「教育は案外どこでもできるのだ」という事実です。

この本では、そんな私が見つけた日本の教育と世界の教育の違い、海外で行われている「新しい教育」の現場の実際や、自学する生徒たちの学習方法などを共有しながら、「教育の選択肢」を紹介します。

そして、最終的には、親ではなく、子どもが自分で教育を「選ぶ」時代になればいいなと考えています。今の教育が不安な方、学校に馴染めなくて困っている方へのヒントを提供できれば幸いです。